

死んでる暇なし

井上吉郎

いのうえきちろう



僕の70年の人生（1945年8月18日、京都市生まれ）を障害で分ければ、「非障害者」（以下、健常者）として暮らした60年と障害者として過ごしている10年に分けられるだろう。もちろん、そして僕にとつては言うまでもないことではあるが、僕の人生にとつて、障害の有無よりも大切なことがある。

その「大切なこと」がなんであるかは後ほどふれることにして、まず最初に僕の障害（時期と障害者になった経緯、障害の後遺症）を語ることにしよう。そしてその障害が僕に強いている「不便」を語り、「不便」を除去するためのたたかいと参加の様子を紹介しよう。最後にそうしたことを受けて今（2016年）やっていること、考えていることを述べよう。

1 障害者になった僕

(1) 60歳で脳幹梗塞になる

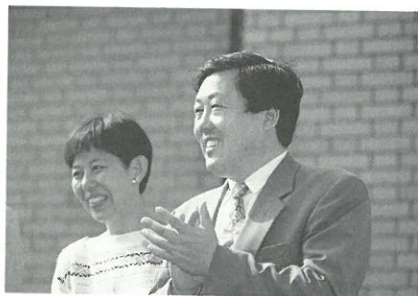
2006年8月12日（60歳の終わり、61歳の直前）、僕は自宅で倒れた。脳幹梗塞だった。その日は夏の暑い日だった。この日、僕とつれあいは朝6時前に家を出て、ごく近くのターミナルで、男の人と待ち合わせていた。ターミナルは嵐電の白梅町駅、家からは歩いて5分というところにある。三人で、終点の嵐山へ行こうという趣向だった。6時過ぎの電車に三人は乗った。

僕は、電車に乗る前から、もつといえれば起床したときから、調子がよくなかった。夜のアルコールがからだに残っているからかな、そういう悪さだった。電車のなかでも、嵐山に着いたときも、僕は寡黙だった。三人で嵐山を散策した。説明好きの僕は、しきりにいろいろなことについて解説しようだが、時間の経過とともに、違和感が広がる。川のほとりが楽しくない。辛抱できなくなった僕は、散策を打ち切って、電車に乗ることを二人に提案した。川から駅までの途中、気分はますます悪くなった。嵐山駅に着くと、辛抱しきれなくなった僕は、腹のものをゴミ箱に戻した。電車に乗り、家に帰った僕はベッドにもぐりこんで、眠りこけた。午前10時くらいだろうか。

ベッドに伏せても気分は好転しない。好転しないどころか、悪くなる一方だった。「おかしい。どこかに異変が起こっている。数日前のめまいと関係しているのでは」、そう考えた僕は、10年ほど診てもらっている医者がある病院に行くことにした。そう考え、自分の考えを述べてからの記憶はとだえている。夕方のことだろうか。

病院に運び込まれた僕は、措置をされたのだろうか、もちろん記憶していない。心臓の動きを明らかにする機械などより、「死んでしまう！」とのつれあいの叫び声の方が、僕には有効だったとは事後に聞かされた。「井上倒れる」で病院にかけつけてくださった友人知人には、今もお礼のしようがない。つれあいの叫び声もあって、僕は死から生への転換を果たした。

「手術は別の病院で」という主治医の意向で、救急車に乗せられて運ばれ、そこで手術



93年 市長選挙



96年 市長選挙

2 不便とのたたかい

脳幹梗塞を起こしたとき僕は60歳を越えていた。もっと若ければちがった「不便」があっただろうが、そのとき、僕はそれまでとはちがう人生に足を踏み出そうとしていた。「60歳までは」と区切られ、僕も同意していたそれまでの数年（京都市長選挙の候補者としての活動の後、援助する人や団体があつて、部屋や「給料」ももらつていた）とちがつて、NPO法人での活動に足を踏み出していた（NPO法人の設立総会は倒れる2ヶ月前のことだった）。そういう条件下での障害であり「不便」だった。

以下、僕が経験した不便のいくつかを紹介しよう。

(1) 立ちふさがる壁

講座、芝居、コンサートなどに出かけると、主催者は「車いす席を用意しています」と言う。その席は最後部や最前列が多い。列の真ん中にはスペースがなく「利用できる」といったものが多数だ。また、階段は段差があつて、スロープになつていない。前から後ろ、後ろから前に移動できない。建物の建築年代が古いほど、車いす使用者への配慮が乏しい。しかしながらごく最近の会場だから配慮が行き届いているかというところ、そうでもない。

その会場は映写装置も付いていて、じつにカンファタブルだ。400人も入れるだろうか。車いす利用者は最前列脇に案内される。普通席の前だ。それを拒否すると最後列に行かねばならない。そこは車いす席でないらしくて、椅子の背中を眺めながら正面を観ることになる。椅子の後ろに張り巡らされている鉄柵の高さが車いすに座ると邪魔をして、視野を遮る。演者が見えないまま音だけ聞こえる。

しかも悪いことに、4つある階段はいずれも段差があつて、後ろから前、前から後ろへ移動できない。さらに悪いことには、最前列と最後列は階がちがう。移動するためにエレベーターを使う必要があるが、エレベーターの乗降口はるか離れたところにある。遠距離恋愛！ 近くて遠い、音は聞こえるけれども姿は遠い。「設計思想」がまちがっているところのようなことが起こる。

さらに言えば、車いす利用（僕のは電動のそれ。クルマのトランクに入る小型の電動車いす）に関する「意識」「見解」もこのような水準に留まっている。僕は、2013年5月28日の『京都新聞』「窓」の欄に、「電動車いすを乗車拒否」と題して投稿した（投稿した文章では会社の名前も書いた）。

5月中旬、京都市北区の白梅町交差点の北東を50mほど上がったところでタクシーをとめた。トランクを開けて降りてきた運転手は、僕の電動車いすを見て、「会社の方針で、電動車いすを乗せることを拒否している」と言った。介助者と僕は、別のタクシーに乗って目的